

アジアの伝統芸能 第一回

なぜアジアの伝統芸能を 学ぶのか

狂言「附子」を例に



外国の人から「日本独自の伝統文化にはどのようなものがありますか？」とたずねられたら、あなたは何と答えますか？

Nôgaku theatre

Japan

Inscribed in 2008 (3.COM) on the Representative List of the
Intangible Cultural Heritage of Humanity (originally proclaimed in
2001)

Nôgaku theatre had its heyday in the
fourteenth and fifteenth centuries, but actually
originated in the eighth century when
Sangaku was transferred from China to
Japan. At the time, the term Sangaku referred
to various types of performance featuring
acrobats, song and dance as well as comic
sketches. Its subsequent adaption to
Japanese society led to its assimilation of
other traditional art forms. Today, Nôgaku is
the principal form of Japanese theatre and
has influenced the puppet theatre as well as
Kabuki. Often based on tales from traditional
literature, Nôgaku theatre integrates masks,
costumes and various props in a dance-based
performance. Moreover, this theatre requires highly trained actors and musicians. Nôgaku encompasses two types of theatre: Noh and Kyôgen, which are performed in the same space. The stage projects into the audience and is linked by a walkway to a "hall of mirrors" backstage. In Noh, emotions are represented by stylised conventional gestures. The hero is often a supernatural being who takes on human form to narrate a story. The distinctive masks for which Noh is renowned are used for the roles of ghosts, women, children and old people. Kyôgen, on the other hand, relies less on the use of masks and is derived from the humorous plays of the Sangaku, as reflected in its comic dialogue. The text is written in ancient language and vividly describes the ordinary people of the twelfth to sixteenth centuries. In 1957 the Japanese Government designated Nôgaku as an Important Intangible Cultural Property, which affords a degree of legal protection to the tradition as well as its most accomplished practitioners. The National Noh Theatre was founded in 1983 and stages regular performances. It also organizes courses to train actors in the leading roles of the Nôgaku.



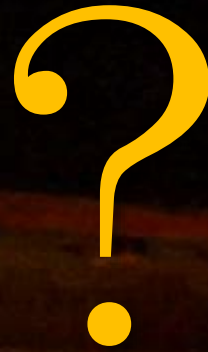
Nomination file

Decision

Inscription: 3.COM

Report

2008年、能楽(能・狂言)が文楽、歌舞伎とともに国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産の代表リストに登録された。



能狂言の研究で、世界の拠点となっている研究
所はどこにありますか？

野上記念法政大学能楽研究所

The Nogami Memorial
Noh Theatre Research Institute of
HOSEI University

日本語

[English](#)

法政大学
HOSEI UNIVERSITY

[トップ](#)

[概要](#)

[研究所の活動](#)

[蔵書・文庫](#)

[デジタルアーカイブ](#)

[利用案内](#)

[刊行物](#)

[リンク](#)





あなたは能狂言を見たことが
ありますか？

外国の人から「日本独自の伝統文化にはどのようなものがありますか？」とたずねられたら、あなたは何と答えるでしょうか。能・狂言、歌舞伎、文楽、講談、落語——名前はいろいろと浮かぶでしょうが、実際に鑑賞したことがあるものはどれくらいあるでしょうか。さらに「その特色は？」と聞かれたら。

この授業では中国の伝統芸能について学ぶとともに、それとの比較を通じて、アジアという大きな視点から日本の伝統芸能の特色について考えていきます。

第一回の今日は狂言「附子」を例に、日本の伝統芸能とアジアとの意外な繋がりについてご紹介します。

狂言

狂言は、今から約六〇〇年前、室町時代に成立した、せりふと仕草で演じられる演劇である。

わが国の古典芸能の中では、唯一の純粹な喜劇であり、二〇〇八年には、能とともにユネスコの無形文化遺産の代表リストに登録された。



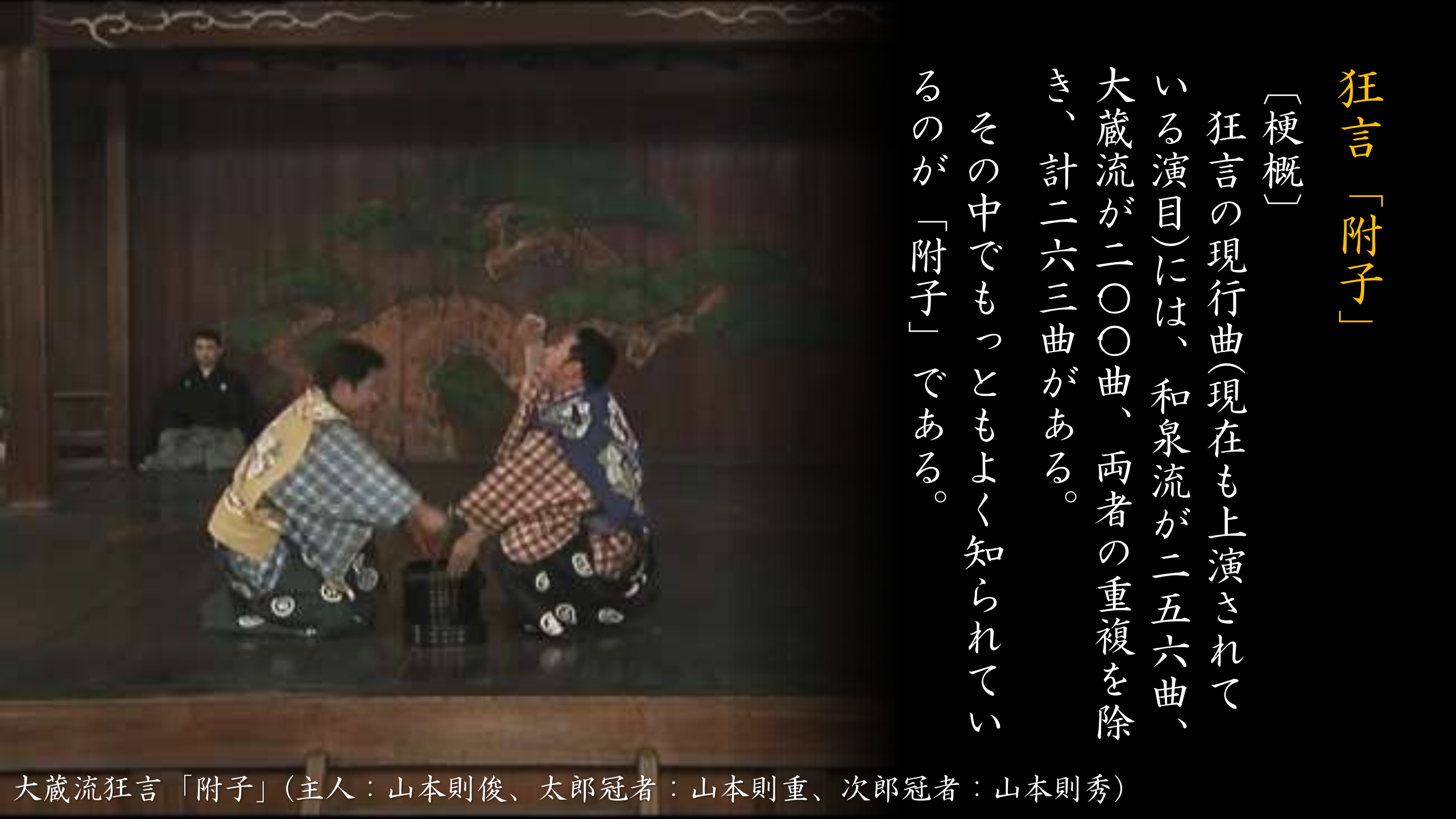
狂言「附子」(『狂言絵』より)

狂言「附子」

〔梗概〕

狂言の現行曲（現在も上演されている演目）には、和泉流が二五六曲、大蔵流が二〇〇曲、両者の重複を除き、計二六三曲がある。

その中でもっともよく知られているのが「附子」である。



大蔵流狂言「附子」（主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）

狂言「附子」

〔梗概〕

主人が太郎冠者と次郎冠者を呼んで留守居を命じる。

主人は桶を取り出し、これは附子（トリカブトの根を乾燥させた毒薬）という猛毒で、風に当たっただけでも死んでしまうから、くれぐれも気をつけるようにと言い残し、屋敷を出る。

大蔵流狂言「附子」（主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀）



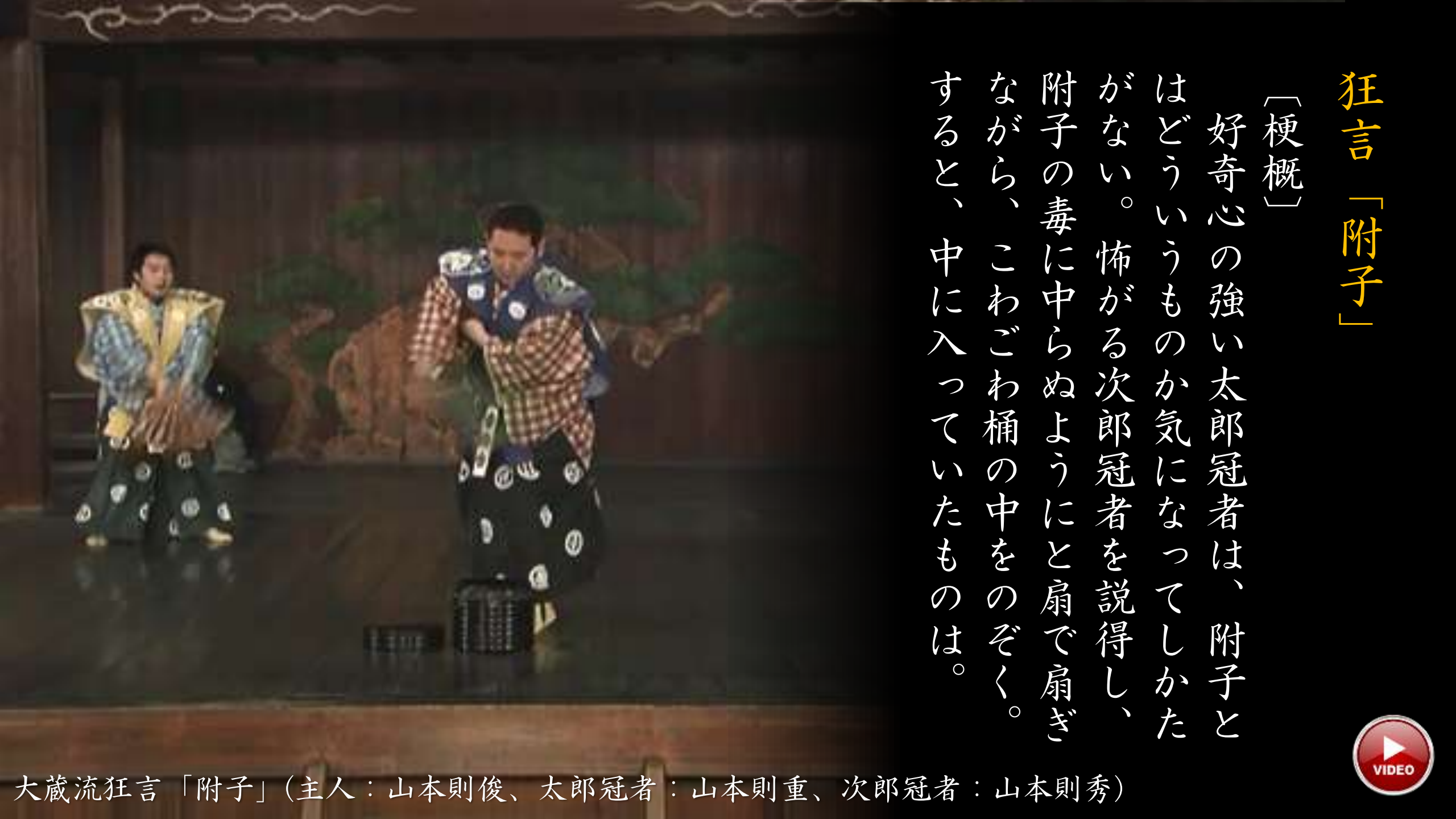
大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

狂言「附子」

〔梗概〕

好奇心の強い太郎冠者は、附子とはどういうものか気になってしかたがない。怖がる次郎冠者を説得し、附子の毒に中らぬようと扇で扇ぎながら、こわごわ桶の中をのぞく。すると、中に入っていたものは。



大蔵流狂言「附子」(主人：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)





大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

狂言「附子」

〔梗概〕

桶の中に入っていたのは、意外にも砂糖だった。吝嗇な主人は、二人に砂糖をつまみ食いされないよう嘘をついたのだ。

太郎冠者と次郎冠者は「こんなうまいもの食べたことがない」と砂糖を頬張る。

砂糖を食べる太郎冠者と次郎冠者





狂言「附子」

〔梗概〕

気がつくと桶の中は空っぽ。
太郎冠者は、主人が帰ってきたとき
の言い訳にと、次郎冠者に主人が
大切にしている掛軸を破らせ、さら
に二人で台天目茶碗を割ってしまう。



天目茶碗を割る太郎冠者と次郎冠者





大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

狂言「附子」

〔梗概〕

主人が外出からもどると、太郎冠者と次郎冠者が泣いている。何を泣いているのだとたずねると、二人は留守の間にうっかりして主人が大切にしている掛軸と台天目茶碗を割ってしまった。そこで死んでおわびをしようとして附子を食べた。ところが、なぜか死ねないので、泣いていたのだ、と言い訳する。

大声で泣く太郎冠者と次郎冠者





大蔵流狂言「附子」

(主：山本則俊、太郎冠者：山本則重、次郎冠者：山本則秀)

狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』（僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物）の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

(鎌倉時代)無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

ある山寺に慳貪なる房主ありて、
飴桶を一つもちて、只一人ある小児
にいささかも食はせずして、
「これは、人の食へば死ぬ物ぞ」
とて、ただ一人食ひてはよく置きお
きしける。

又テ利益ナク身ヲ用ズン俄ニ打スルトキハ是ガタメニツクリ
罪ノミ身ニツヒテ下物モ中有ノ故ニ身ヲタスクル事ナレ
度ヲ行ズレバ求メテ得セズツキセス事ヲシラスコソ返々モ口カ
ナレ是ヲアラツヒテ孝養モセズ子息弟子ノ中ノアヒキモ財寶
ノ故ナリ或山寺ニ有徳ノ房主弟子門徒多ク有ケリ頻死ノ
處分モセザリケルニ弟子共處分論ノ中アシクシテ問答シ
葬モセズ兩三日ニ及フホドニタサク成ケルヲ見カ子テヨソヨリ
葬シテケリ彼葬シタル者カダリキムナニ近キ事也サレバ心アラ
ム人ハ眞實ノ福田ノ藏ニ積蓄テ七分全得ノ慧業ヲ修スヘ

キナリ世ノ人ノカレコキト思ハ、カナシタ、善事ニツキヤス事ヲ
ハオコカマシキ事ト慳貪ノモノハ思アヒタリ實ニ後ノ世ノツカ
キタクハヘシレサルコソコカマシク覺エ能ク思ハカラスヘシ
或山寺ニ慳貪ナル房主アリテ飴桶ヲ一モチテ只一人アル
小兒ニイサ、カモクハセズ是ハ人ノクハバ死ヌ物ツトテダバ一
人クヒテハヨクヲキクシケルヲ此兒イカ、是ヲクハマシト思テ
房主他行ノヒニタナニ高クヲキタルヲトルホドニ髮ニモ小袖
ニモウチコホソツタタリケリ日比ホレト思タルニ能クニ
三盃クヒテ房主ノ秘藏ノ水瓶ヲ兩タリノ石ニ落ソウチワリテ
房主ノ歸タル時シクト泣何事ツケレカラスノキヤヤトイ
ヘハアサマシキ事ノ候御水瓶ヲアヤマチニウチワリテ候時ニイカ
ナル御勘當モヤト思ヒ候テ命イキテモヨシナク覺ヘテ人ノツヘ

〔鎌倉時代〕無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

この児、いかがしてこれを食はましと思ひて、房主他行の暇に棚に高く置きたるを取るほどに、髪にも小袖にもうちこぼしてつけたりけり。

日頃欲しほしと思ひけるままに、よく二、三杯食ひて、房主の秘蔵の水瓶を雨だりの石に落として打ち割り、房主の歸りたる時、しくしくと泣く。

ナレ。是ヲアラツヒテ善養モセズ。子息弟子ノ中ノアヒキモ財寶ノ故ナリ。或山寺ニ有德ノ房主。弟子門徒多ク有ケリ。頻死ノ處分モセザリケルマ、ニ弟子共處分論ノ中アシクシテ問答シ葬モセズ。兩三日ニ及フホドニ。タサク成ケルヲ見カ子テヨソヨリ葬シテケリ。彼葬シタル者カタリキ。ムナニ近キ事也。サレバ心アラム人ハ眞實ノ福田ノ藏ニ積蓄テ七分全得ノ慧業ヲ修スヘ

キナリ。世ノ人ノカシコキト思ハ、カナシタ。善事ニツキヤス事ヲハオモカマシキ事ト慳貪ノモノハ思アヒタリ。實ニ後ノ世ノツカキタクハヘシレサルコソ。オモカマシク覺エシ能ク思ハカラスベシ。或山寺ニ慳貪ナル房主アリテ。拾桶ヲ一モキテ只一人アル小兒ニイサ、カモクハセズ。是ハ人ノクハ死ヌ物ツトテダ。一人クヒテハ。ヨクヲキクシケルヲ。此兒イカ、ノ是ヲクハマシト思テ。房主他行ノヒマニ。タナニ高クヲキタルヲトルホドニ。髪ニモ小袖ニモウチコボソツケタリケリ。日比ホレト思タルマ、ニ能クニ三盃クヒテ。房主ノ秘蔵ノ水瓶ヲ。雨タリノ石ニ落ソウチワリテ。房主ノ歸タル時。シクシト泣。何事ツケレカラスノオキヤヤトイヘ。アサマシキ事ノ候。御水瓶ヲアヤマチニウチワリテ候。時ニイカナル御勘當モヤト思ヒ候テ。命イキテモヨシナク覺ヘテ。人ノツヘ

（鎌倉時代）無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

「何事ぞ、けしからずの泣きやうや」と言へば、

「あさましき事の候。お水瓶をあやまちに打ち割りて候時に、いかなる御勘当もやと思ひ候て、命生きてもよしなく覺へて、人の食へば死ぬと仰られ候物を一盃食べ候へども死なれ候はず、二、三盃食べつれども死なれ候はず、髪にも小袖にもつけて死なんとし候へども死なれ候はず」と言ひける。

三盃クヒテ房主ノ秘藏ノ水瓶ヲ兩タリノ石ニ落シウチワリテ房主ノ歸タル時シクト泣向事ゾケレカラスノチキヤトイヘハアサマシキ事ノ候御水瓶ヲアヤマチニウチワリテ候時ニイカナル御勘當モヤト思ヒ候テ命イキテモヨシナク覺ヘテ人ノウヘバ死ト仰ラレ候物ゾ一盃食べ候ヘドモ死ナシ候ハスツ一ツタタヘツシドモシナシ候ハスカミニモ小袖ニモツケテ死ナントモ候ヘ共スヘテ死シ候ハストイヒナル慳貪ナルハ一サレ損也少シクハセタラハ水瓶ハワラシレカレ見ノ心カ賢カリケル學問ノ聖賢モ無下ニハアラビ盜人ト智者ノ相ハ同シト云ヘリ舍利弗ハムカシ盜人也智慧ヲモテ盜モ能スル也

沙石集卷第七下終

神護寺

迎接院

乾元二曆外季春之候此書道證上人奉渡畢

道慈

于時乾元第二之曆外季春初之六日於洛陽之西山西方寺又重一部書寫之次此卷與一校書改之

畢

片山隱士道慈春秋五十四

(鎌倉時代)無住『沙石集』

卷七下 慳貪者事

慳貪なるはまさに損なり。少し食はせたらば、水瓶は割られじかし。児の心賢かりけり。学問の器量も無下にはあらじ。

ハオコサマシキ事ト慳貪ノモノハ思フタリ其ノ後ノ世ノツカ
キタクハヘクシラサルコソコヨカマレク覺ユレ能ク思ハカラスベシ
或山寺ニ慳貪ナル房主アリテ拈桶ヲ一モキテ只一人アル
小兒ニイサ、カモクハセズ。是人ノクハ死ヌ物ツトテタマ一
人クヒテハヨクヲキクシケルヲ此兒イカノ是ヲクハマレト思テ
房主他行ノヒマニタナニ高クヲキタルトホドニ髮ニモ小袖
ニモウキコホソツケタリケリ。日比ホレト思ナルマ、ニ能クニ
三盃クヒテ房主ノ秘藏ノ水瓶ヲ雨ダリノ石ニ落ソウチワリテ
房主ノ歸タル時シクト泣何事ツケレカラスノチキヤヤトイ
ヘハアサマシキ事ノ候御水瓶ヲアヤマチニツチワリテ候時ニイカ
ナル御勘當モヤト思ヒ候テ命イキテモヨシナク覺ヘテ人ノクハ
バ死ト仰ラレ候物ヲ一盃タベ候ヘドモ死ナシ候ハス。二三
タベツレドモシナシ候ハスカミニモ小袖ニモツケテ死ナントモ候
ヘ共スヘテ死シ候ハストイヒナク慳貪ナルハ一サレ損也。少しク
ハセタラハ水瓶ハワラシレカレ見ノ心カ賢カリケリ。學問ノ器量
モ無下ニハアラシ。盜人ト智者ノ相ハ同シト云ヘリ。舍利弗ハ
ムカシ盜人也。智慧ヲモテ盜モ能スル也。

沙石集卷第七下終 神護寺 迎接院

乾元二曆外季春之候此書道證上人奉渡畢

于時乾元第二之曆外季春初之六日於洛陽之西
山西方寺又重一部書寫之。次此卷與一校書改之
畢 片山隱士道慧春秋五十四

狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』（僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物）の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

『法師物語絵巻』

このモチーフは僧の貪欲や妄語を風刺する笑話として、絵巻物の題材にもなった。

近年公開された『法師物語絵巻』には、僧と小僧の対話を通じて、この笑話が生き生きと描かれている。



悪れは香の粉にば死ぬる程に
死に薬を入れ具ひて食うぞ



あれは何をなり候うぞ
これの法師にも賜ひ候へ

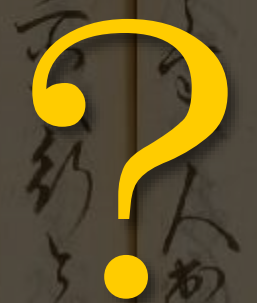
この鉢を過ちに打ち割りて候が、
いかなるべき身や(ら)んと思ひて、
生きて何にししべきとて、坊主の
死ぬる御薬の御下ろしを多く取り
食いて候へども死なれず候……

やれ、われは何事にさように
泣くぞ 何事がありつるぞ

狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』（僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物）の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立

あつてはるるふふといふ
うまは上らううまうまといふ
ふと引て此のちやうと
あつてはるるふふといふ
これあつてはるるふふといふ
さいんをてあつてはるるふふといふ
あつてはるるふふといふ



本は、言狂正天
ない現
し存
か
言の姿を
狂言の姿を
どこに
蔵さ
るか

あつてはるるふふといふ
うまは上らううまうまといふ
ふと引て此のちやうと
あつてはるるふふといふ
これあつてはるるふふといふ
さいんをてあつてはるるふふといふ
あつてはるるふふといふ

野上記念法政大学能楽研究所

The Nogami Memorial
Noh Theatre Research Institute of
HOSEI University

日本語

[English](#)

法政大学
HOSEI UNIVERSITY

[トップ](#)

[概要](#)

[研究所の活動](#)

[蔵書・文庫](#)

[デジタルアーカイブ](#)

[利用案内](#)

[刊行物](#)

[リンク](#)



天正狂言本

ふすきたう

一はうす一人出て二人よび出す。
「よ所へ行」とてるすにおく。
「おくのまにぶすがある。あけて
見てしするな」とゆふ。「もつ
とも」とてゐる。

一はうす一人出て二人よび出す

ふすきたう

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふ

うき世とせむ三日月は六
十日計移りくゝと又
是れより三日月を重れし
るしとめ

八層

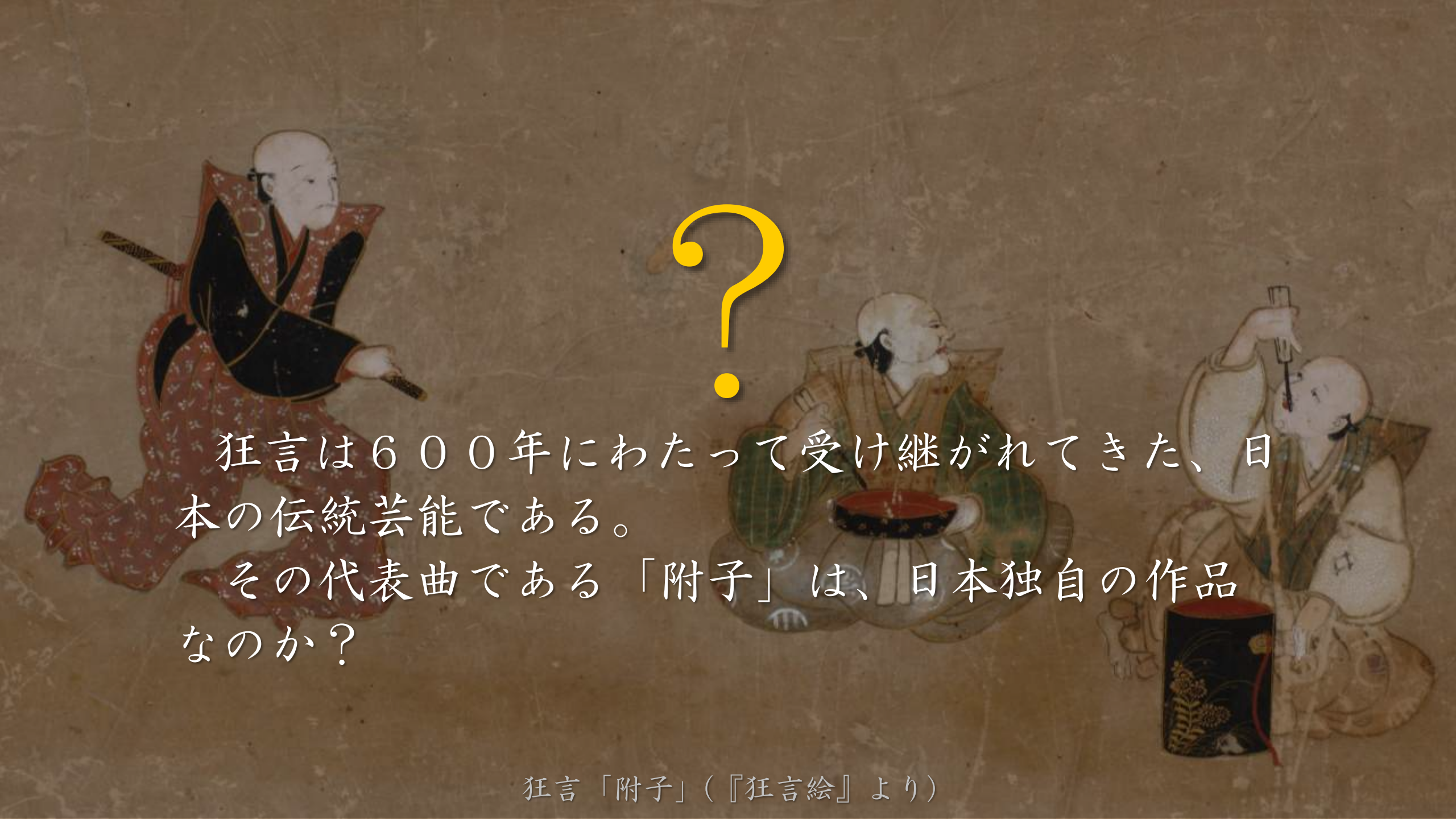
一人あて八層と答はるる清
水(素)又一人あて八層清
水(素)こりり念とありひま
かりたるといれりいありと
ふう(木)あやうるをうけ
ふ人の声(木)うき世に

天正狂言本

なれもせず。三口四口五口六口
十口とねぶりくへども 死な
れぬ事こそ目出けれ」。ひ
やうしとめ

狂言「附子」の歴史

鎌倉時代	13世紀に僧・無住が編んだ説話集『沙石集』に当時の民間伝承として「附子」のモチーフが記録される
室町時代	14～15世紀に描かれた『法師物語絵巻』（僧侶の貪欲や吝嗇を風刺した絵巻物）の中に「附子」のモチーフが描かれる
安土桃山時代	16世紀に編まれた『天正狂言本』に寺の住持と小僧を主人公とした「ぶすきとう（附子砂糖）」が記録される
江戸時代	『祝本狂言集』に大名、太郎、次郎の主従狂言として「附子」が記録される 大蔵流、和泉流など諸流派の「附子」が成立



狂言は600年にわたって受け継がれてきた、日本の伝統芸能である。

その代表曲である「附子」は、日本独自の作品なのか？

狂言「附子」（『狂言絵』より）

新たな資料の発見

十九世紀の末、シルクロードの仏教石窟（莫高窟第十七窟）で発見された古文書から、狂言「附子」の類話を収めた古写本が見つかった。

敦煌写本『啓顔録』である。

敦煌莫高窟第17窟(画面右端)と発見された古文書群

敦煌本啓顔録の発見

一九〇〇年、シルクロードのオアシス都市・敦煌の近郊の仏教石窟に暮らす王円籙という道士が、そこに小さな隠し部屋（莫高窟第一七窟）があるのを発見した。

十一世紀ごろ封印されたと考えられるこの隠し部屋には、四世紀から十一世紀までの文書数万点が保存されていた。

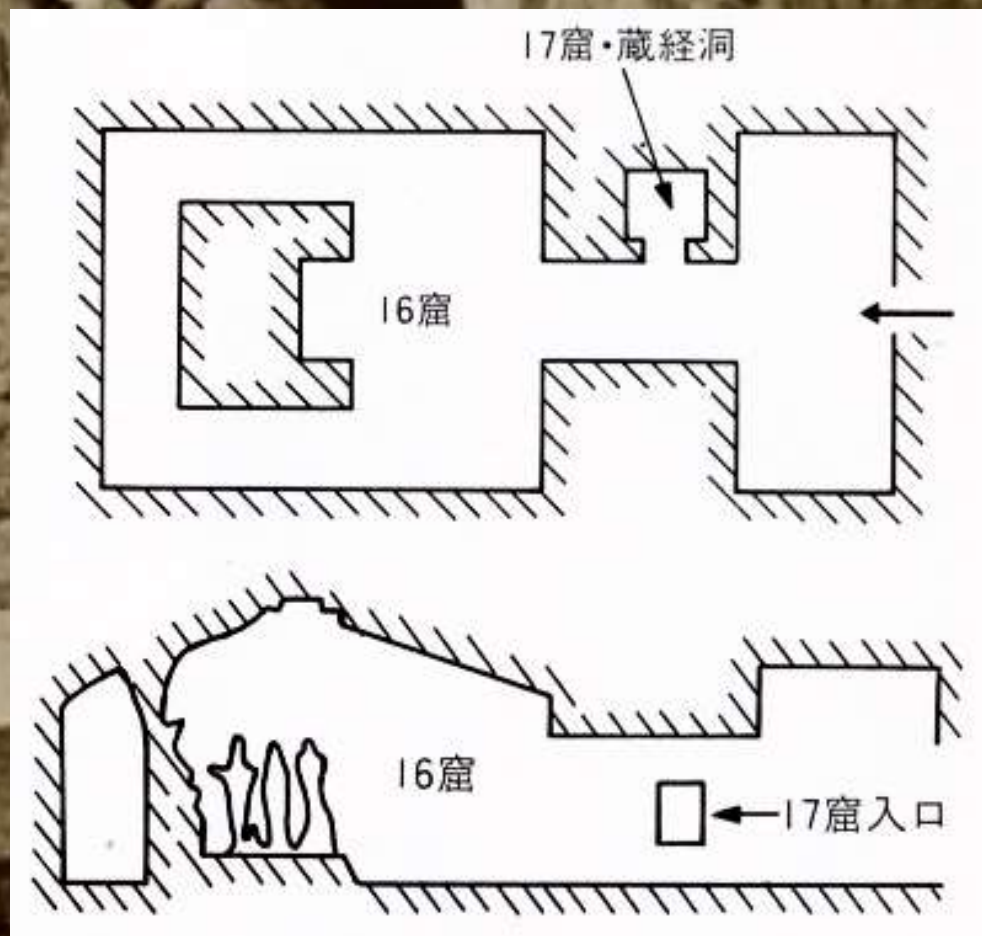
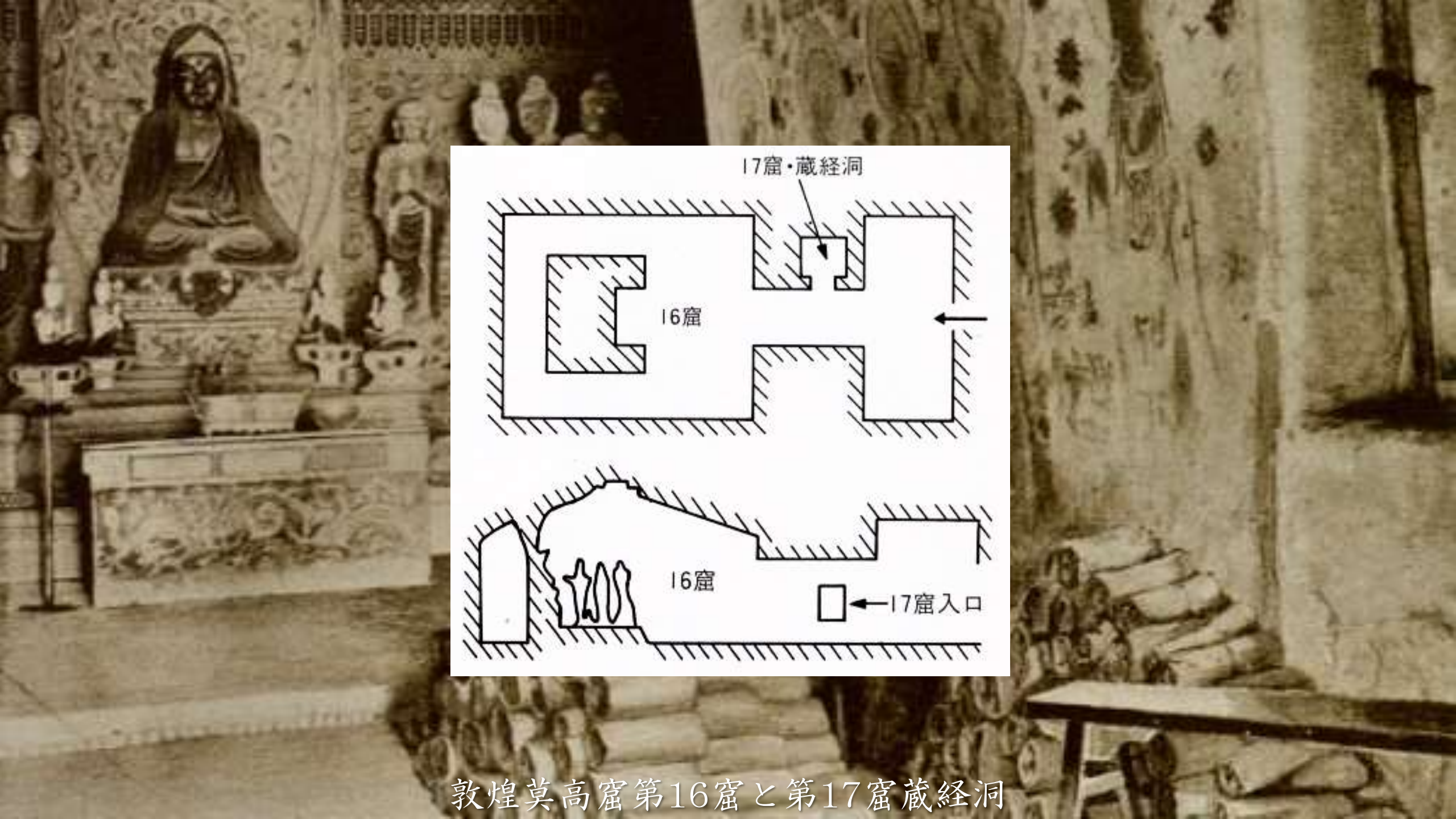
その中から、狂言「附子」とよく似た物語を持つ『啓顔録』という笑話集の唐代写本（七二三年）が見つかった。



敦煌石窟で大量の古文書が発見される(1900年)

清朝





敦煌莫高窟第16窟と第17窟藏經洞



敦煌莫高窟第16窟と第17窟藏経洞

敦煌写本『啓顔録』(S六一〇)

『啓顔録』はその後散逸し、一部の作品が『太平広記』などに転載されているが、敦煌写本『啓顔録』に見られる狂言「附子」の類話は、伝わっていないかった。

では、その内容はどのようなもの

なのだろうか。
密於房中私食訖訖餽蜜留鉢盂中密瓶送床脚下語弟子云好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗餽食之唯殘兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯有兩顆蜜又喫盡即大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死不謂至今平安僧大嗔曰作勿生即喫盡我汝許餽弟子即以手拏鉢盂中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老疾恒共僧於仙堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂外溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯朗朗鐺子溫酒我弟子聞鈴每即溫酒數日已後弟子貪為戲劇遂忘溫酒僧動鈴已後來見酒冷曰何意今日不聽鈴聲為与舊聲有別僧曰鈴聲但冷、打、所以有別遂不溫酒僧曰而赦之開元元年十一月廿三日

有一僧忽憶鮓喫即持寺外作得數十箇鮓不買得一瓶
密於房中私食之訖殘鮓留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子云好看我鮓勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮓食之唯殘
兩箇僧來即索所留鮓蜜見鮓唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我鮓蜜弟子云和尚去後聞此鮓香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮓弟子
即以手拈鉢盂中取兩箇殘鮓向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老疾病恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗朗鐺子溫酒待
むかし一人の僧、ふと蒸しパンが
食べたくなり、寺の外で数十個の蒸
しパンと一瓶の蜜を買い、僧房の中
でこっそり食べていた。食べ終わる
と残った蒸しパンを鉢に入れ、蜜の
瓶を寢床の下に置いて弟子に言った。
「わしの蒸しパンがなくならないよ
う、しっかり見張っておれ。寢床の
下の瓶の中は猛毒じゃ、飲めばすぐ
に死んでしまうぞ」

有一僧忽憶鮓喫即持寺外作得數十箇鮓不買得一瓶
密於房中私食之訖殘鮓留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子云好看我鮓勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮓食之唯殘
兩箇僧來即索所留鮓蜜見鮓唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我鮓蜜弟子云和尚去後聞此鮓香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮓弟子
即以手作鉢盂中取兩箇殘鮓向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老疾病恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗朗子溫酒待
僧が去ると、弟子は瓶から蜜を出
し、蒸しパンにつけて食べると、二
個だけ残しておいた。僧が来て、
取っておいた蒸しパンと蜜を出すよ
うにいったが、蒸しパンは二個しか
残っておらず、蜜もすっかり嘗め尽
くされていた。

（僧は）怒って言った。

「どうしてわしの蒸しパンと蜜を食
べたのじゃ」

有一僧忽憶餽喫即持寺外作得數十箇餽不買得一瓶
密於房中私食之訖殘餽留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子云好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗餽食之唯殘
兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許餽弟子
即以手作鉢盂中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老疾恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗朗鐺子溫酒待

弟子は言つた。

「和尚様が去った後、蒸しパンの良
い香りがしたので、がまんできずに
取って食べてしまいました。しかし
和尚様に怒られるのが怖くて、瓶の
中の毒藥を飲んで死のうと思つたの
ですが、不思議なことにいまだに何
ともありません。」

有一僧忽憶鮓喫即持寺外作得數十箇鮓不買得一瓶
密於房中私食之訖殘鮓留鉢盂中密瓶送床脚下語弟
子云好看我鮓勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃
人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗鮓食之唯殘
兩箇僧來即索所留鮓蜜見鮓唯有兩顆蜜又喫盡即
大嗔云何意喫我鮓蜜弟子云和尚去後聞此鮓香實忍饑
不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死
不謂至今平安僧大嗔日作勿生即喫盡我汝許鮓弟子
即以手作鉢盂中取兩箇殘鮓向口連食報云只作如此喫即
盡此僧下床大叫弟子回即走去 有一僧年老疾病恒共諸
僧於仏堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂向房
溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語云汝
好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰鈴
云湯湯朗朗鐺鐺汝即可依鈴語湯湯朗鐺子溫酒待

僧は怒って言った。

「どうすれば、あんなにたくさん
の蒸しパンを平らげられるんじゃ」

すると弟子は鉢の中に残しておい
た二個の蒸しパンを手でつかみ、つ
ぎつぎと頬張って言った。

「こうやったんですよ。」

僧が寢床から降りて大声で怒鳴る
と、弟子は逃げていってしまった。

敦煌写本『啓顔録』(S六一〇)

敦煌写本『啓顔録』は、卷末の奥書から唐の開元十一年(七二三年)に書き写されたものであることがわかった。

この古文書の発見により、鎌倉時代の『沙石集』よりも五百年以上も前に、中国に狂言「附子」のルーツがあったことが明らかになった。

密於房中私食訖殘餽留鉢盂中密瓶送床脚下語弟子云好看我餽勿使欠少床底瓶中是極毒藥喫即斃人此僧即出弟子待僧去後即取瓶寫蜜搗餽食之唯殘兩箇僧來即索所留餽蜜見餽唯有兩顆蜜又喫盡即大嗔云何意喫我餽蜜弟子云和尚去後聞此餽香實忍不得遂即取喫畏和尚來嗔即服瓶中毒藥望得即死不謂至今平安僧大嗔曰作勿生即喫盡我汝許餽弟子即以手拈鉢盂中取兩箇殘餽向口連食報云只作如此喫盡此僧下床大叫弟子回即走去 有僧年老疾恒共僧於仙堂中轉經即患氣短口干每須一盃熱酒若從堂外溫酒恐堂中垢遲即於堂前懸一銅鈴私共弟子作号語遂好意聽吾鈴聲即依鈴語弟子不解鈴語乃問之僧曰云湯湯朗朗錯錯汝即可依鈴語湯朗朗錯錯子溫酒我弟子聞鈴每即溫酒數日已後弟子貪為戲劇遂忘溫酒僧動鈴已後來見酒冷曰何意今日不聽鈴聲為与舊聲有別僧曰鈴聲但冷、打、所以有別遂不溫酒僧曰而赦之

敦煌写本『啓顔録』(S610、723年写本)

単口相声『学徒』

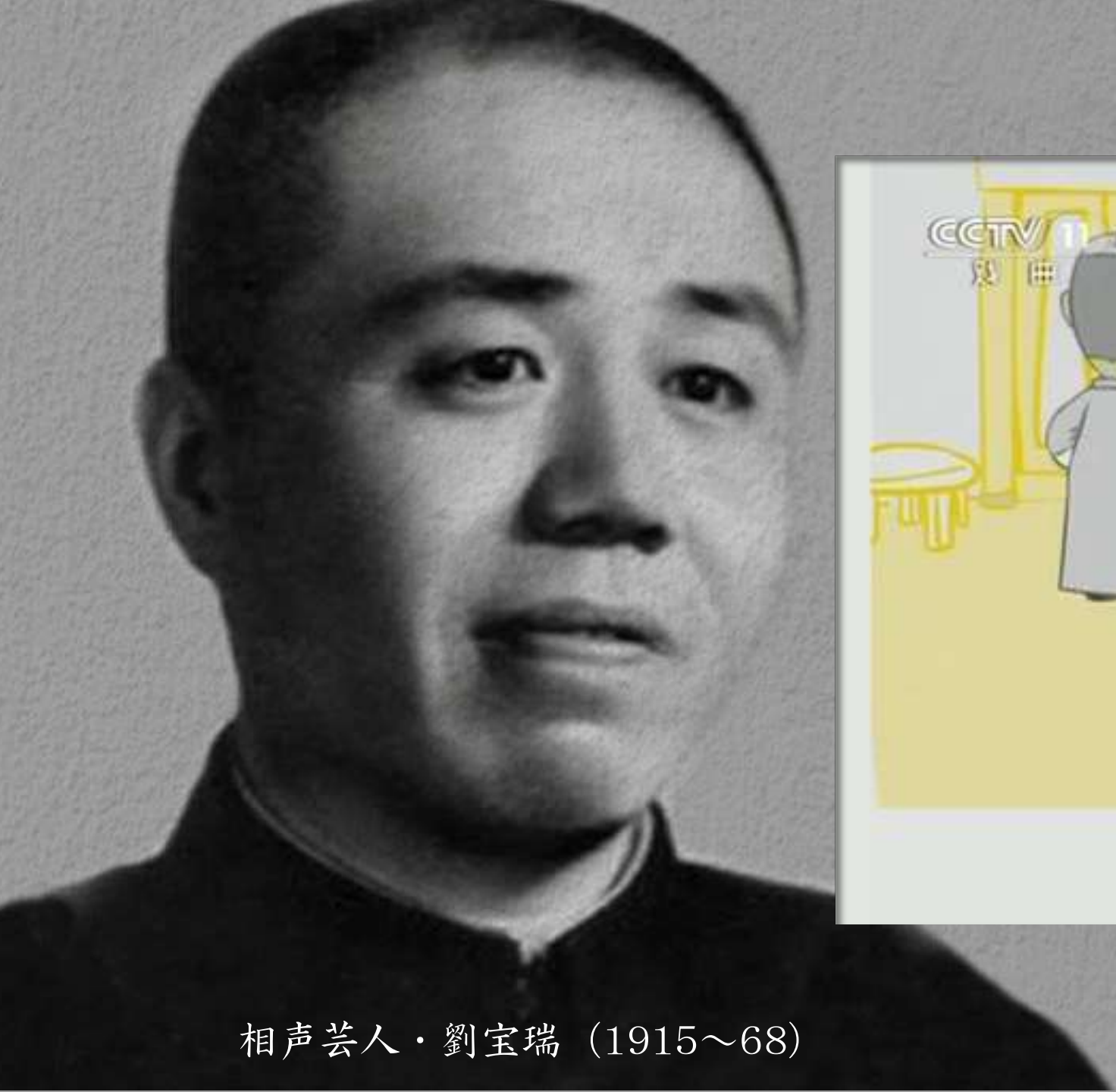
この話は文献は散逸したもの、民間では脈々と語り継がれていた。その一つに単口相声（中国落語）の『学徒』がある。

主人公は家具屋の奉公人の「私」。日頃から主人のけちに不満を持っていた「私」は、主人の留守に鶏やハムなどのご馳走を平らげ、主人が毒だといった酒を飲んでしまう。

店に戻った主人にとがめられた「私」は、逆にとんちを働かせて主人をやりこめてしまう。

相声芸人・劉宝瑞（1915～68）





相声艺人·劉宝瑞 (1915~68)

〔朝鮮〕姜希孟『村談解頤』

十五世紀ごろ、朝鮮半島でも狂言「附子」の類話が伝えられていた。

李氏朝鮮初期の文官・姜希孟

（강희맹、一四二四～八三）が編んだ説話集『村談解頤』に、次のような話が見られる。

村談解頤 全

(朝鮮)姜希孟『村談解頤』

庭の柿が熟したので、僧はこれを摘むと籠の中に入れ、梁の上に置いて、喉が渇くたびにこれを啜っていた。小僧が「それは何か」とたずねると、僧は「これは毒の果物じゃ。子供が食えば、舌が爛れて死ぬぞ」と言った。

用事で外出することになり、小僧に僧房の見張りをさせた。すると小僧は竹竿で梁の上の籠を下ろし、食べたいだけ柿を食べると、茶臼で蜜の瓶を打ち割った。

村談解頤

全

(朝鮮)姜希孟『村談解頤』

小僧は柿の木に登り、僧が帰るのを待った。僧が帰ると、部屋には蜜が満ち、柿の籠が落ちてゐる。僧は怒り、杖で柿の木を叩き、「早く降りて来い！」といった。

小僧は、「私が鈍かったために、誤って茶臼で蜜瓶を割ってしまいました。怖くなって死のうとしたのですが、首をくくるにも縄がなく、首を斬るにも刃物がありません。そこで籠に入った毒の果物をすべて食べたのですが、どうしても死ねず、木の上に登って死ぬのを待っていました」

僧はそれを聞くと、笑って赦した。

村談解頤

全

なぜアジアの伝統芸能を

学ぶのか？

日本はアジアとの交流の中で独自の文化を築き上げてきた。このため、日本文化の特色を理解し、世界の人々に伝えるためには、まず何がアジアに共通のもので、何が日本独自のものなのかを正しく理解する必要がある。

この講義では、アジアの庶民文化に大きな影響を与えた中国の民間伝承（四大民間故事）と、それを伝えた伝統芸能（戯曲・曲芸）の世界を学ぶとともに、日本との類似点や相違点について考えていきたい。